

ほっとステイ体験記 受け入れてよかった

赤沢 遠山義人

第一回目初日、大型バスが集落に入ってくる。予定された時間は正確だ。「おはようございます」と笑顔のガイドさんにつき生徒さんが降りてくる。「今日お世話になる遠山さんです。ご挨拶して下さい」とユーユー立科スタッフから声が掛かる。お互い挨拶を交わすとバスは次の受け入れ先に進んでいく。ほっとステイ日帰り農村体験受け入れの初スタートだ。自宅に案内し、「今日一日皆さんの部屋、トイレはこです」荷物を置き、自己紹介をする。事前にプロフィールが送られているので、それを見ながら、趣味等の話しを加え、生徒の気持ちを和らげる。農業体験のメニューは受け入れ家庭に任されるので、その時に行っている作業を一緒にやる。田畔の枯れ草を集めたり、玉ネギやニンニク掘りをしたり、ボカシ堆肥をしたり、草むしり等と何でもやってみよう。生徒は初めての事はかき、ぬかるみに入って靴を汚し、めずらしい蛙を追いかけ、何十匹もみんなでつかまえる。「気をつけるよー」自分の子どものように「ダメー」いつしか怒っていることもある。自分もこの年齢にな

ると孫が増えた様で張りも出る。受け入れてよかった。これがほっとステイだ。暑い青空の下で汗をぬぐい持参のお弁当をひらき立科のすがすがしい自然を生徒全員で喜び合う。自家用のジャガ芋、えんどうの味噌汁と漬物で昼食。家族と一緒に、又、妻の採ったイナゴの煮付け。みんなバツと叫んで食さない。無理に親から聞いたタンパク源の話で目を閉じて食させようまいというまで勧める。又、後日イナゴの絵を描き、貴重な体験で食べさせて頂きありがとございましたの色紙の寄せ書きも送られる事になりました。最後になりますが、都市と農村の交流は決して性急に形は見えないもの。いつの日か立科のおじいちゃん、おばあちゃんを思い出し訪ねてくれればいいなあ。そんな玉手箱のような仕事だ。



千葉県蘇我中学校の生徒とともに

ほっとステイとおばあちゃん

茂田井 伊藤 花江

昨年、初めてほっとステイに挑戦してみました。以前、蓼科の夏期林間学校の健康管理に十数年勤務した事があったので生徒との付き合いも少しは理解できるのではないかと思ひ、でも高齢の為物忘れも多くなっている。


ほっとステイの当日も自分の昼食の釜のスイッチを入れ忘れていて「おばあちゃん私達のお握りを一緒に食べて」と優しく言ってくれ「ありがと」とおいしく頂く。又、緊急の場合の携帯電話を置き忘れて、東京の息子に電話して音で知らせてもらう様教えられたり「心配かけてごめんね」と謝れば「家のおかあさんもそうだから心配しないで」「おかあさん何歳」「42歳」ああ、私の半分より若いと一寸安心。

畑の往復に生徒は足が速く一緒に歩けない。手を引いてもらったりして。でも口だけは達者。空腹に勝る調味料は無いと言うからお腹を空かして食事にしうとか。モロコシは塩をつけて食べるのが一番。ナスの鉄火味噌は最高とか食後の片付けを手伝ってくれて嬉しいとか言っで。でも本当に良く日中の六時間程の体験も楽しかったと言って、枝豆採り、サ

ツマイモ掘り、玉葱の収穫など汗を流してくれた。

又、或る日は午前中暑いのに一生懸命働いてくれたので午後は家の中で楽しく百人一首取り。又、坊主めぐりなどと私自身もつかれて一緒に過ごす事もあり。又、戦時中の苦しい想い出、食事など今とは比べられない貧しさなど。バスの時間もぎりぎり。私も若い生徒との一日にパワーをもらい明日への力となった想い。帰りの車窓から姿が見えなくなるまで手を振る生徒達の一生の想い出になる事を願って自己満足している私です。

平成二十三年十月二十七日
海城学園高等学校 一年三組
ほっとステイ



川野 辺 薫
北村 昂 司
許 智 永
小島 裕 貴
丸山 光 彬
吉田 遼 一

生徒から貴重な経験ができましたとお礼の色紙が届きました